

人生の課題「立命」

今年には雨の降らない空梅雨に、梅雨寒の日々が続きましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。心と体は相関関係にあります。お天気が良いと心身共に晴れ晴れとして気持ち良いですが、どんより曇り空に梅雨寒だと、気持ちもカラッとしませんよね。そんな事からも、太陽の恵みを肌で感じた6月でした。

さて私事なのですが、今年の6月ほど気忙しい年はありませんでした。真成寺の大黒祭にはじまり、フラダンスの司会進行&ソロでのダンス。サンフォルテ・フェスティバルでの講演会。コーラス・フェスティバルでは『レ・ミゼラブル』で出演。おまけに、人生初となる、テレビ朝日放送(テレビ朝)による谷川寛敬の密着取材が3日間続くなど、本当に息つく暇も無く充実した時間を過ごす事が出来ました。

そして6月下旬から、7月1日には午前と午後と、2軒のお寺さんで御説教を依頼されています。脳ミソの切り替えが大変でした。それだけに、また1つ成長させて頂く機会を頂いた事は、この上無い幸せです。

そんな私の知人は、私に「人生を謳歌していて羨ましい。人生成功の秘訣って何かあるの？」など聞いてきます。そこで考えてみました：

人生成功の秘訣とは？
そもそも成功とは、一体全体、何をもって成功とするのか？

何かを為して行くためには、日々の努力精進が欠かせません。やった事しか出来ないのが人間だとも思います。とすれば、いま現在の自分が置かれている状況、目の前にある事柄をシツカリと見詰め、それを真摯に受け止め、真剣に行く。

人生成功のコツは2つあります。まさにコツが2つで、「コツコツ」やること(笑)。

それ以外に物事を為す力に恵まれないのではないかと思います。

また成功か失敗かを決めるのは、他でもない、自分自身ではないでしょうか。他人の評価は評価として、自分自身がどう思うかが、その後の自分を決める重要なポイントだと思います。幸・不幸も同じ様な事が言えると思います。自分自身の中に、幸と不幸を決める心を持っています。

と言うわけで、隣の芝生は青く見えるのが人情ですが、他人と自分を比べる事もなければ(そもそも比べようがありませんが…)、他人にどう思われようが、自分自身が納得がいく行動を選び取っていく事が何より大事だと思います。

●【儒学者・佐藤一斎という人物】

皆様は佐藤一斎(さとういつさい)をご存じでしょうか？佐藤一斎についての教えは以前から当欄でお伝えして

きたのですが、読者の中で佐藤一斎をご存じなく、説明を求められる方が少なからずおられましたので、簡略ながら佐藤一斎について記した後、佐藤一斎をケーススタディにして師弟教育について思いを巡らしたいと思えます。

佐藤一斎は安永元年十月二十日(一七七二年十一月十四日)、美濃国岩村藩(岐阜県恵那市)の家老の次男として江戸で生まれました。儒学者の最高権威として崇められ、門下生は実に三千人とも言われ、一斎から育った弟子の中には、佐久間象山(さくましようざん)、山田方谷(やまたほうこく)、横井小楠(よこいしやうなん)などが名を連ね、孫弟子には勝海舟、坂本龍馬、吉田松陰、小林虎三郎(米百俵で有名)等々がいます。彼らを通して、一斎の教えが幕末維新により新しい日本を作っていった指導者達に大きな影響を与えた事は申すまでもありません。また西郷隆盛(南洲)も佐藤一斎が著した『言志四録(げんししりやく)』全一三三巻から、特に感銘を受けた一〇一条を抜き書きして『南洲手抄言志録(なんしゅうていしりやく)』として座右に置いたと言われています。

●【師弟教育のポイント】

そんな『言志四録』の一節に「真(しん)に大志(たいし)有(あ)る者は、克(よ)く小物を勤め真に遠慮有る者は、細事(さいじ)を忽(ゆるがせ)にせず」とあります。要約すると、「大

きな志を持つ人間ほど、小さな事をちゃんとやり遂げる。遠慮りをする」ということです。つまり、先のことをよく考える人間ほど、些細なことを放っておかない。

「大事の前の小事」です。小さな事の積み重ねこそが大事を成していくのです。自分の身の回りの整理整頓もできない人間には、何かを為す事など出来ないという厳しい指摘も、この言葉には込められていると思います。

ここで師弟教育のポイントとなる言葉をいくつかご紹介いたします。

★「師生同学(しせいどうがく)」

「師生」は先生と生徒。教える者と教えられる者。親子の関係も本来こうでなくてはならないと思います。また「同学」は、「同門・同窓」と同じ様な意味合いです。同様に「同窓」は同じ学校・同じ師に学んだという意味合いになります。つまり、先生と生徒が共に学ぼうという考え方があります。吉田松陰も松下村塾(しようかそんじゆく)において「師生同学」の姿勢で幕末の志士達を育てました。彼は弟子を取らず、一緒に学ぼうという姿勢を貫きました。そこで育ったのが、高杉晋作であり、伊藤博文であり、山県有朋らなのです。

※松下村塾とは、江戸時代末期(幕末)に、長州萩城下の松本村(山口県萩市)に存在した私塾です。

★「凡事徹底(ぼんじてってい)」
「読んで字の如く、当たり前前」
を徹底してやり続けるという事です。例えば、挨拶は大きな声です。行動はきびきびする。言葉は正しく丁寧に使う。掃除は隅々まで綺麗にする。履き物を脱いだら揃える。これらの行動は、昨日今日で急に出来るものではありません。身体が自然に動いて出来るようになるには、コツコツやり続ける事が大切なポイントです。一回や二回口で言っただけでは身に付きません。これら当たり前前の事を徹底してやり続けると、みな非凡(ひぼん)になります。何も難しい事はなく、ちよつとした「凡事」なのですが、徹底して行う事が出来ない上司、教育者、親御さんなどの姿があります。

★「観面呈示(てきめんていじ)」
「面と向かって指導する」という意味です。例えば、ポケットに手を突っ込んでいたら、その場で注意します。またある時に癖でポケットに手が入っていたら、またその場で注意する。これを指摘し続けるわけです。そのうち段々と、顔を見たら自然とポケットから手が出るようになります。そのうち手が入らなくなつてきます。見たらその場で注意するという、これも当たり前前の事です。

★「啐啄同時(そつたくどうじ)」
「卵から雛(ひな)が孵(かえ)る時、雛が内側から殻をつつく事を「啐」と言います。逆に外側から、親鶏は殻が割れるのを手伝ってあげる事を「啄」と言います。これを同時に行わないと、中の雛は死んでしまうんですね。まだ孵らない時につけば、当然死にますし、弱い雛は助けてやらないと孵ることが出来ません。」

我が子が日々年々スクスクと成長していきます。そしてその年齢その年齢において、どこかで脱皮すると言いますか、自立精神が生まれる時期が都度おとずれます。その瞬間を見逃したらいけないのです。もし、その気になつていないのを無理矢理に指導教育すると、反発を招いて、言う事を聞かない子に成長するかもしれません。かといって、せっかく脱皮しようとしている時に見逃してしまいますと、成長の機会を失ってしまいます。成長脱皮するその瞬間を一人一人注意深く窺いながら、そして自立できるようにしていくのが親御さんであり、教育者であり、上に立つ人間の大切な務めであると思っています。

これも真剣勝負です。子供や生徒、あるいは部下といった教えを受ける側の人間達に真剣勝負を挑むくらいの気持ちで当たらなければなりません。上に立つ人間が、自らが率先して行う姿を見せる。真剣に努力する教えを受ける側に見てもらおうくらいの気持ちで臨む事が大切だと思います。

何をにおいても、まずは自分自身の問題なのではないかと思えます。自分の身が修められずに、師弟教育はもろろんのこと、世の中の大事は成せないという事に繋がってくるでしょう。

「命」という字は、「口と令」が字源となっており、「令」は神の意思、天の意思という意味だそうです。それが口から発せられたものを「命」と呼びます。したがって神や仏が「生きなさい」と命じたことが「生命」となります。運命、天命、宿命とは、それぞれの人間に天から与えられた、不変の真理と言えるでしょう。それらをもとにして、自らの人生を切りひらいていく事を、「立命(りつめい)」と言います。そうした与えられた「命」のもとに、自らの人生をより良い方向にひらいていく。それが我々1人1人に与えられた人生の課題ではないかと思えます。

合掌 副住職 谷川寛敬



【真成寺開創五百年記念祭】

来る十一月四日(土)、開創五百年記念祭を賑々しく開催します。

記念祭の目玉になるの稚児行列!

定員は百名に限定にさせて頂こうと考えています。

参加希望の方は、お気軽にお問合せください。

『お稚児さんを、大募集しています』

●法要日時

平成二十九年十一月四日(土)

●開催場所

真成寺周辺の大通りを練り歩きます

●参加費・衣装代

一万円(衣裳一式・履き物も含む)

●当日の流れ

・受付………十二時～十二時半

・お練り開始……十三時半

※約一時間です

●申し込み〆切

九月三十日(土)

もしくは、定員百名に達した時点

申込用紙は真成寺でお渡し致します。

また、ご不明な点や、詳細についても、お気軽に真成寺へお問合わせください。

一度きりの、記念すべき大祭です。

お子様のご参加、お待ちしております!